

Akutobhayā の譬喩表現に 関する一考察

安井光洋

はじめに

Akutobhayā (ABh) は Nāgārjuna の主著である *Mūlamadhyamaka-kārikā* (MMK) の注釈書であり、数ある MMK 注釈書の中でも最古層のもと考えられている典籍である。しかし、その内容は様々な問題を孕んでおり、典籍自体の成立の経緯について詳細が未だ明らかになっていない。

その中でも最大の問題は、後代のいくつかの MMK 注釈書において ABh という名が明記されることなく、その記述が引用されているという点である。それは特に鳩摩羅什による漢訳のみが現存する青目訳『中論』(『青目註』) と、*Buddhapālita-mūlamadhyamaka-vṛtti* (BP) において顕著である。とりわけ『青目註』については、内容があまりにも酷似しているため「本来は同一のテキストであった」という説⁽¹⁾もある。また、BP については第 23 章以降のテキストがほぼ完全に ABh と一致しているという奇妙な関係性が存在する。

このように内容の類似が広く見受けられる三注釈書であるが、その一方で著しい相違が見られる箇所もある。それが「譬喩表現」である。譬喩は仏典の中でも特に重要な表現形式のひとつであり、ABh においても様々なパターンで用いられている。しかし、それらの譬喩が『青目註』、BP ではほとんど引用されていないのである。

この問題について先行研究を参照すると、まず Huntington [1986] は ABh における譬喩が、各偈の注釈で簡潔な例証 (Short summary illustrations) として多用されていることを特徴として挙げる。さらに、BP の 23 章以降は ABh のテキストがそのまま当てはめられているが 23、24、

25、27章の末尾に置かれた譬喩のみBPでは省かれていることを指摘している。⁽²⁾

これについて同論文は「ABhの段階的成立」という見解を提示している。つまり、ABhは最初期の原典から流動的に発展し、現行のテキストに至ったとする説である。そして、それに基づき『青目註』、BP成立時にはABhに譬喩表現が用いられておらず、後代になって現行テキストに見られる譬喩が付加されたとする。

次に斎藤[1989]は第23章以降だけでなく、その他の章でもABhが章末で譬喩を頻繁に用いている例を挙げている。しかし、それらの譬喩が『青目註』にもBPにも見られないことから、やはりHuntington[1986]と同じく、初期段階のABhにはこれらの譬喩が存在しておらず、後代になって付加されたという見地に立つ。⁽³⁾

また、同論文はBPの譬喩表現の特徴として「反論者の無理解や恣意的な強弁を、空しいこと、あるいは身勝手な偏見であると諭し、非難するところに狙いをもつ」⁽⁴⁾という点を挙げる。さらに、これについてはSaito[2013]でも改めて論じられている。

ABhの譬喩表現とそれをめぐる問題については以上のような論考があるわけだが、いずれの先行研究においてもABh、『青目註』、BPの三注釈書から実例を挙げながら具体的に比較するという作業は行われていない。そのため、今回あらためてそれらを精査したところ、上記先行研究の説に該当しない例がいくつか確認された。よって本稿においては、それらの結果を踏まえてABhの成立について考察を試みたい。

1. ABhの譬喩

まずABhにおける譬喩の例から見よう。ABhにおける譬喩表現は各章の末尾に見られることが多く、それについては斎藤[1989]ですでに省察されているが、それ以外の箇所でも多数の用例が見られる。主な例をいくつか挙げると、①石女の子(mo gsham gyi bu：第2章第3偈・第2章第11偈)、②足の不自由な者(grum po：第2章第4偈)、③石女の子が死ぬ(mo gsham gyi bu 'chi ba：第2章第17偈)、④1つの種に2つの芽(sa bon gcig la myu gu gnyis pa：第2章第23偈)、⑤種子と

芽 (sa bon dang myu gu : 第4章第1偈・第7章第4偈)、⑥砂中の穀物 (bye ma la 'bru ma : 第5章第2偈)、⑦兎の角 (ri bong gi rva : 第5章第6偈)、⑧火と水 (me dang chu : 第7章第2偈・第16章第8偈)、⑨猫と鼠 (byi la dang byi ba : 第7章第9偈)、⑩灯りと闇 (mar me dang mun pa : 第14章第1偈)、⑪盲人にとっての太陽 (dmus long gis nyi ma : 第22章第15偈) などである。

以上の用例を見ていくと、まず①から④まではいずれも第2章「去ることと来ることの考察: gatāgataparīkṣā」で用いられているものである。そのうち①と③では存在しえないものの喩えとして「石女の子」という表現が用いられている。

②ではいま去られつつある所が独立して成り立っているのではなく、「去ること」に依存して成立していることを、足の不自由な者が杖に頼ることに喩えており、④は「去る主体が去る」という表現の矛盾を上記のように喩えている。

⑤は事物が生じる際の原因と結果の相互的な依存関係について喩えられたものである。⑥と⑦は上記①、③の例と同様に存在しえないものを表す。⑧、⑨、⑩は「生住滅の三相」や「繫縛と解脱」など同時に成立しえないものを喩えた表現である。

そして、⑪は「戲論によって慧眼を傷つけられた者は如来を見ない」ということを「盲人が太陽を見ることができないように」と喩えている。以上を見ると ABh の注釈中に見られる譬喩表現は、いずれも矛盾した見解、あるいは不合理な主張への批判として否定的な意味で用いられていることが分かる。

また、ABh における譬喩の用法に関してはいささか問題のあるものも見受けられる。その問題とは、一つの譬喩表現が複数の意味で用いられているというものである。実際にそのような使い方をされているのは以下に挙げる「父と子: pha dang bu」という譬喩表現である。

例1 第4章第3偈

'bras bu med pa'i rgyu med do/ (v.3d)

'bras bu med pa'i rgyu ni cung zad kyang med de/ pha dang bu

bzhin no/ / ⁽⁵⁾

結果のない原因はない。[v.3d]

結果のない原因は決してない。父と子のようなものである。

例2 第2章第19偈～第21偈

gal te 'gro ba gang yin pa/ / de nyid 'gro po yin gyur na/ /
byed pa po dang las nyid kyang/ / gcig pa nyid du thal bar
'gyur/ /(v.19)

gal te 'gro dang 'gro ba po/ / gzhan pa nyid du rnam brtags
na/ /

'gro po med pa'i 'gro ba dang/ / 'gro ba med pa'i 'gro por
'gyur/ /(v.20)

gang dag dngos po gcig pa dang/ / dngos po gzhan pa nyid du
ni/ /

grub par gyur pa yod min na/ / de gnyis grub pa ji ltar yod/
(v.21)

pha dang bu bzhin no/ / ⁽⁶⁾

もし去るはたらきそのものが、去る主体であったならば

行為主体と行為が同一なものであるという過失に陥る。[v.19]

もし去るはたらきと去る主体が異なるものであると考えたならば
去る主体のない去るはたらきと、去るはたらきのない去る主体と
なってしまうだろう。[v.20]

同一である事物にも異なる事物にも

成立することが無いならば、その両者にどのような成立があるの
か。[v.21]

父と子のようなものである。

例3 第20章第7偈

gal te tshogs pa dang 'bras bu lhan cig kho na skye bar gyur na/
de lta na skyed pa tshogs pa nyid gang yin pa dang bskyed pa
'bras bu gang yin pa pha dang bu lta bu de dag dus gcig tu

'byung bar thal bar 'gyur ba de ni mi 'dod de ⁽⁷⁾

もし集合と結果が共に生じるならば、そうであれば生じさせる集合と、生じられる結果という父と子のようなそれらが同時に生じるという過失に陥るのでそれは正しくない。

上記の例を見ると、まず例1では前述の⑤のように原因と結果の相互的な依存関係の喩えとして「父と子」という表現が用いられていることがわかる。しかし、例2では去るはたらき (gamana) と去る主体 (gantr) の間には同一、別異いずれの関係性も成り立たないということが「父と子」で喩えられているのである。さらに、例3では同時に生じることがあり得ないものとして「父と子」という表現が用いられている。以上のように ABh における譬喩は同一の表現であっても、必ずしも同一の内容を喩えたものとして用いられているわけではない。

また、上記三例のうち第20章第7偈で「父と子」の譬喩を用いる例は BP にも踏襲されている。

BP 第20章第7偈

gal te tshogs pa dang 'bras bu lhan cig kho nar skye bar 'gyur na/ de lta na skyed pa rgyu gang yin pa dang bskyed pa don gang yin pa de dag dus gcig tu 'byung bar thal bar 'gyur bas de yang mi 'thad de/ 'di ltar pha dang bu dag dus gcig tu ji ltar skye bar 'gyur ⁽⁸⁾

もし集合と結果が共に生ずるならば、そうであれば生じさせる原因と、生じられる対象が同時に生じるという過失に陥ることになるのでそれも不合理である。このように、どうして父と子が同時に生まれることになるだろうか。

ここで BP は「生じさせる原因 (rgyu) と、生じられる対象 (don)」というように、より詳細な説明となるよう ABh の注釈を改変しつつも、「父と子」という譬喩を踏襲している。さらに興味深いのはその譬喩を用いている箇所文体も ABh とは異なっており、それが Saito [2013] で示さ

れる BP の譬喩表現の特徴である「反論者への皮肉を含んだ疑問」⁽⁹⁾の形に書き換えられている点である。

また、この「父と子」という譬喩を BP が用いているのはテキスト全体でもこの一カ所のみである。これについては、ABh に見られる三種の「父と子」の譬喩のうち、BP ではこの用例だけが妥当であると判断され、他の二つは省かれたものと考えられる。

以上のことから、一つの譬喩表現を複数の意味で用いる ABh の用法はかなり異質であると言える。そのため、それらの譬喩が他の注釈者によって意図的に省かれ、異なった表現へと書き換えられていたとしても不思議はないだろう。そして、上記の BP の記述はその可能性を示す一例であると言える。

一方、上記の先行研究のように ABh の譬喩表現が後代の付加であるという見地に立つならば、ABh への加筆が行われた時点で BP はすでに成立していたという可能性も考えられる。しかし、ABh の譬喩表現に BP からの影響は見られず、むしろ上記のような問題を含んだ用法が ABh には見受けられる。そのため、もし ABh への加筆より先に BP が成立していたとしても ABh の加筆者はその内容を知らなかったということになるだろう。

2. 『青目註』の譬喩

続いて『青目註』における譬喩表現を見てみよう。『青目註』にも様々な種類の譬喩が見られるが、先述の通りその多くは ABh と一致しておらず、『青目註』独自の表現となっている。

そして、中でも特徴的な例として以下の二例が挙げられる。

例 1

佛説。大乘諸法。若有色無色有形無形有漏無漏有爲無爲等諸法相入於法性。一切皆空無相無縁。譬如衆流入海同爲一味。⁽¹⁰⁾

例 2

大聖説空法 爲離諸見故 若復見有空 諸佛所不化

大聖爲破六十二諸見。及無明愛等諸煩惱故說空。若人於空復生見者。是人不可化。譬如有病須服藥可治。若藥復爲病則不可治。如火從薪出以水可滅。若從水生爲用何滅。如空是水能滅諸煩惱火。⁽¹¹⁾

まず例1は第1章第11偈⁽¹²⁾の注釈である。ここではいかなる有無の見解も本来的にはすべて空であるということ、多くの支流も海に入ればすべて一つとなるという譬喩で表現している。例2は第13章第9偈⁽¹³⁾とその注釈であるが、ここでは「空性とはあらゆる見解を離れることであるから、『空性という見解』に捕われては意味がない」という偈の所説を、薬を服用して病気になったり、本来火を消すための水から火が出たりするように本末転倒なものであると喩えている。そして、その表現に続いて「空は煩惱の火を消す水である」という譬喩を用いる。

これらの二例はいずれもMMKの中心思想である空を喩えたものであるが、このような譬喩表現はABhやBPの用例とは意味が異なる。前述のようにABhは矛盾した見解への批判として譬喩を用いており、BPは反論者の無理解に対する非難を譬喩で表現していた。つまり、両者とも否定的な意味で譬喩を用いているのである。他方『青目註』はここで自らの主張を表現、説明するためにいわば肯定的な表現として譬喩を用いているのである。このような用例は『青目註』における譬喩表現の特徴の一つと言えよう。

また、このように独自の所説が目立つ『青目註』の譬喩であるが、ABhと共通する譬喩もわずかではあるが存在する。よって以下ではそれらの中でも、とりわけ特徴的な例を見てみよう。

ABh

glang po che'i mtshan nyid ni mche ba can nyid dang/ sna gcig
'phyang ba nyid dang/ ma mchu nya phyis kyi rnam pa 'dra ba
nyid dang/ mgo bo klad pa gsum gyis brgyan pa nyid dang/ rna
ba zhib ma 'dra ba nyid dang/ bshul gzhu ltar sgur ba nyid dang/
gsus pa 'phyang ba nyid dang/ lto ba che ba nyid dang/ mjug ma
'phongs dol 'dug pa⁽¹⁴⁾ nyid dang/ rkang lag sbom zhing zlum pa

bzhi dang ldan pa nyid dag yin na/ de dag ma gtogs par gang la
glang po che'i mtshan nyid 'jug par 'gyur ba'i glang po che de dag
gang yin/ de bzhin du rta'i mtshan nyid kyang/ gdong ring ba
nyid dang/ rna ba sbubs can mtho ba nyid dang/ rngog ma can
nyid dang/ rkang lag rmig pa gcig pa bzhi dang ldan pa nyid
dang/ rnga ma drung nas skye ba dang ldan pa nyid dag yin na/
de dag ma gtogs par gang la rta'i mtshan nyid 'jug par 'gyur ba'i
rta de dag gang yin te ⁽¹⁵⁾

象の特徴は牙を有しており、1本の鼻が垂れていて、下唇は牡蠣の殻に形が似ていて、頭頂部は3つに飾られていて、耳はザルに似ていて、背は弓のように曲がり、腹は垂れ下がり、胃は大きく、尾は投網を据えたようであり⁽¹⁶⁾、太くて丸い脚を持つものである。それらを除いても象の特徴を表すような象がどこにいるのか。それと同様に馬の特徴についても、顔が長く耳は穴を有して高く、たてがみを持ち、足と蹄は同一のものを4つ持ち、尾が近くに生えている。それらを除いても馬の特徴を表すような馬がどこにいるのか。

『青目註』

如有峰有角尾端有毛頸下垂是名牛相。若離是相則無牛。若無牛是諸相無所住。⁽¹⁷⁾

上の二例はいずれも MMK 第5章第3偈の注釈であるが、ABh では「象と馬の特徴」が挙げられている箇所が、『青目註』では「牛相」とされている。これは羅什によって漢訳された際に地理的な要因から、より中国に馴染み深い動物へと書き換えられたと推測することもできるが、おそらくそうではないだろう。

なぜなら ABh のこの象と馬の譬喩は、『青目註』と同じく羅什によって漢訳された『十二門論』に同じ形で以下のように引用されているからである。

『十二門論』

如象有雙牙。垂一鼻。頭有三隆。耳如箕。脊如彎弓。腹大而垂。尾端有毛。四脚龜圓。是爲象相。若離是相。更無有象可以相相。如馬豎耳垂鬃。四脚同蹄。尾通有毛。若離是相。更無有馬可以相相。⁽¹⁸⁾

この一説については上記の譬喩だけでなく、この直前に MMK 第5章第3偈と思われる偈頌が説かれている。⁽¹⁹⁾そして、さらに興味深いことに、『十二門論』は ABh の象と馬の譬喩だけでなく、『青目註』の牛の譬喩についても形は若干異なるものの他の章で引用しているのである。⁽²⁰⁾

以上の点に関して、なぜ『青目註』が牛の譬喩のみを挙げ、『十二門論』が二種の譬喩を用いているかということについては疑問が残るものの、少なくとも訳者である羅什が ABh の象と馬の譬喩を認識していたことは明らかだろう。そのため、羅什の時代にはすでに MMK 第5章第3偈について象と馬の譬喩を用いるという解釈は成立しており、そのテキストが中国へ伝わっていたということになる。

ここで中国における ABh の伝承について確認すると、漢訳典籍における ABh への言及と思われるものでもっとも古い例は羅什訳『龍樹菩薩伝』中の以下の記述である。

廣明摩訶衍作優波提舍十萬偈。又作莊嚴佛道論五千偈。大慈方便論五千偈。中論五百偈。令摩訶衍教大行於天竺。又造無畏論十萬偈。中論出其中。⁽²¹⁾

ここに見られる『無畏論』という名称がチベット訳に伝わる "*M-ūlamadhyamaka-vṛtti-akutobhayā* / dbu ma rtsa ba'i 'grel pa ga las 'jigs med" (いかなる所にも恐れ無き根本中論註) という ABh の名称と一致することから、この『無畏論』が ABh を指すものと考えられ、日本でも ABh はしばしば『無畏論』と呼ばれてきた。しかしながら、この本文中にある「無畏論十萬偈」という表記は ABh の現行テキストより明らかに多い。そのため、ここでいう『無畏論』が現在伝わっている ABh と同様のものであったとは安易に確定し難い。⁽²²⁾さらに、上記の例では「青目」の名については言及がなく、『青目註』にも『無畏論』の名が出てこない

ため、内容の酷似した両者の関係性について伺うことができない。

以上を踏まえると、羅什は漢訳こそしなかったものの、龍樹作とされる『無畏論』というテキストについてはその存在を知っており、その内容についても『青目註』で引用されている内容の他に、先に見た「象と馬の譬喩」などを認識していたということになる。

3. その他の注釈書の譬喩

次に漢訳典籍以外で ABh の譬喩が後代の注釈書に踏襲されている例を見てみよう。まず、以下は ABh の譬喩が BP で用いられている例である。

例 1

ABh 第 3 章第 3 偈 導入部

'dir smras pa/ mig ni rang gi bdag nyid la mi lta yang gzhan dag
la lta ste/ dper na me bdag nyid sreg par byed pa ma yin yang
gzhan dag sreg par byed pa bzhin no ⁽²³⁾

問う。眼は自分自身を見ないが、しかし他者を見る。たとえば火が自分を焼くことはなくても、他者を焼くようなものである。

BP 第 3 章第 3 偈 導入部

smras pa/ me bzhin du lta ba la sogs pa 'grub ste/ dper na me ni
sreg par byed pa yin yang gzhan dag sreg par byed pa yin gyi/
rang gi bdag nyid sreg par byed pa ni ma yin no ⁽²⁴⁾

問う。見るはたらきなどは火のように成立している。たとえば火は焼くものであり、他者を焼くが、自分自身を焼くことはない。

例 2

ABh 第 20 章第 8 偈 導入部

'dir smras pa/ 'bras bu ni tshogs pa nyid kyi snga rol nyid na yod
de/ de ni physis tshogs pa nyid skyes pas gsal bar byed de mar me
dang bum pa bzhin no ⁽²⁵⁾

問う。結果は（生じさせる）集合より先に存在している。それは後に

集合が生じることによって明らかである。灯火と壺のようなものである。

BP 第20章第8偈 導入部

smras pa/ 'bras bu ni tshogs pa nyid kyi snga rol nyid na yod de
de ni physis tshogs pa nyid skyes pas gsal bar byed de/ mar mes
bum pa bzhin no ⁽²⁶⁾

問う。結果は（生じさせる）集合より先に存在している。それは後に集合が生じることによって明らかである。灯火によって（照らされる）壺のようなものである。

まず例1であるが、これは第3章第3偈⁽²⁷⁾の直前にイントロダクションとして置かれた反論者の主張である。この火の喩えについてはその第3偈で実際に論じられるテーマであるから、ここに反論者の説として挙げられていても不思議はない。むしろ、MMKの文脈のみでこれを読むと、唐突に火の喩え（*agni-dr̥ṣṭānta*）が言及されるため、その文脈に整合性を補完するうえでもこれは必要な一節であると言える。そのため、この喩えは同様の形で『青目註』のほか、Bhāvivekaの*Prajñāpradīpa*（PP）、Candrakīrtiの*Prasannapadā*（PSP）といった他の注釈書でも用いられている。⁽²⁸⁾

例2は第20章第8偈⁽²⁹⁾の直前に、やはり導入部として置かれている反論者の主張である。ここでは「生じられた結果はそれを生じさせる集合より先に存在している。」という見解を、「灯りに照らされて顕現する前から壺が存在しているように」という譬喩で表現している。

ABhもBPも反論者の主張で譬喩を用いているのはこの二ヶ所のみであるから、BPで示される反論者の説としての譬喩表現はすべてABhに基づいているということになる。

続いて反論者の説以外でBPがABhの譬喩を引用している箇所を見てみよう。

第 11 章第 8 偈

gang gi phyir de ltar yang dag pa ji lta ba bzhin du brtags na
dngos po thams cad la snga phyi dang lhan cig gi rim pa dag mi
'thad pa de'i phyir 'khor ba 'ba' zhig la sngon gyi mtha' yod pa
ma yin par ma zad kyi dngos por 'dod pa thams cad la yang sn-
gon gyi mtha' yod pa ma yin pas/ dngos por snang ba ni sgyu ma
dang smig rgyu dang dri za'i grong khyer dang gzugs brnyan
bzhin du 'grub pa'o ⁽³⁰⁾

以上のように真実をありのままに観察するに、あらゆる事物に先、後、そして同時という次第は不合理である。そのため、輪廻のみに前際が存在しないのではなく、事物と見做されるあらゆるものにも前際は存在しないので、目に見える事物は幻、蜃気楼、ガンダルヴァ城、陰影のように成立しているのである。

これは MMK 第 11 章第 8 偈への注釈部分であり、この章の末尾に結びとして置かれている一節である。そして、この記述は ABh と BP で完全に一致している。前述の通り ABh の注釈を随所で引用しつつも譬喩についてはほとんど踏襲していない BP であるが、以上のように必ずしもすべての譬喩が省かれているわけではない。⁽³¹⁾

続いて他の注釈書についても例を挙げていこう。インド撰述の MMK 注釈書で BP 以外に ABh の譬喩を用いているのは PSP である。用例はそれほど多く見受けられないが、具体的なものを以下に挙げる。

例 1

ABh 第 6 章第 3 偈

'di ltar 'dod chags chags pa dag /phan tshun ltos pa med par
'gyur/ / (v.3c,d)

lhan cig nyid du skye bar gyur na/ 'di ltar 'dod chags dang chags
pa dag phan tshun ltos pa med par 'gyur ro/ /de lta na de gnyis
brtag pa nyid du thal bar 'gyur zhing brtags na skyon chen po
kho nar 'gyur te/ ba lang gi rva bzhin no ⁽³²⁾

すなわち貪りと貪者が相互に依存することが無くなるだろう。

(v.3c,d)

共に生じたならば、すなわち貪りと貪者が相互に依存していないことになるだろう。そのような場合には、その両者は常住であるという過失が付随し、常住であるなら大過のみとなるだろう。牛の角のようなものである。

PSP 第6章第3偈

bhabetām rāgaraktau hi nirapekṣau parasparam/ / (v.3c,d)
sahabhāvāt savyetaragovisānavad ity abhiprāyaḥ ⁽³³⁾

なぜなら、貪りと貪者が相互に依存していないということになるだろう。(v.3d)

同時に存在するからである。牛の左右の角のようなものである、という意味である。

例2

ABh 第16章第8偈

bcings pa grol bzhin yin par gyur na/ /bcings pa dang grol ba dus
gcig tu 'gyur bas de ni mi 'dod de/ bcings pa dang grol ba gnyis
su mi mthun pa'i phyir mar me dang mun pa bzhin no ⁽³⁴⁾

すでに繫縛された者が現に解脱しつつあるとするならば、繫縛と解脱が同時ということになってしまうので、それは正しくない。繫縛と解脱の両者は相反するからである。灯火と闇のようなものである。

PSP 第16章第8偈

evaṃ sati baddhe mucyamāne parikalpyamāne baddhatvān
mucyamānatvāc ca yaugapadyena bandhamokṣaṇe syātām / na ca
paraspara viruddhatvād ālokāndhakāravād ekasmin kāle band-
hamokṣaṇe upapadyete ⁽³⁵⁾

そうであるなら、すでに繫縛された者が現に解脱しつつあると想定すると、繫縛され、かつ現に解脱しつつあるので、繫縛と解脱が同時に

あることになる。しかし、灯火と闇のように相互に矛盾するものであるから、繫縛と解脱が同時にあることは不合理である。

例 3

ABh 第 22 章第 15 偈

rtogs par byed pa dang rlom sems su byed pa dang spros pas blo
gros kyi mig nyams pa de dag thams cad kiyis dmus long gis nyi
ma bzhin du/ de bzhin gshegs pa spros pa las 'das shing/ zad pa
med pa chos kyi sku las mthong bar mi 'gyur ro ⁽³⁶⁾

分別と自尊心と戯論によって智慧の眼を傷つけられている彼らはみな、盲人にとっての太陽のように、如来が戯論から脱して、尽きること無き法身を見ることはないだろう。

PSP 第 22 章第 15 偈

te svakair eva prapañcair hatāḥ santas tathāgataguṇasamṛddher
atyantaparokṣavartino bhavanti / tataś ca śavabhūtāḥ etasmin
pravacane na paśyanti tathāgataṃ jātyandhā ivādityam ⁽³⁷⁾

彼らは自分たちの戯論によって害されている者たちであるから、如来の特性の大いなる完成から完全に覆い隠されて暮らしているのである。そして、そのため屍のようになっており、この教説において如来を見ること^がない。盲人たちが太陽を（見る^{こと}がない）ように。

これらの例を参照すると、いずれも ABh と PSP で注釈の文章は異なっているものの、譬喩については一致していることがわかる。また、例 1 については「貪りと貪者が同時に生じる」というテーマであるため、PSP は ABh に無い「左右の (savyetara)」の語を補ってより具体的な表現をしている。

以上の三例はいずれも『青目註』や BP では用いられていない譬喩表現である。これについて考えられる可能性としては、『青目註』と BP の著者がこれらの三例については認識していたものの意図的に省いたか、もしくは『青目註』、BP の成立時には ABh の中にこれらの譬喩がまだ存在し

ておらず、それ以降かつ PSP 成立以前に ABh の本文中へと挿入されたかのどちらかであろう。

そして、最後に ABh、『青目註』、BP、PP、PSP すべてに共通している用例を見てみよう。

ABh 第7章第28偈

'di la dngos po gang la 'gag par brtag pa de ni gnas skabs de nyid dang gnas skabs gzhan gnyi gas kyang 'gag pa nyid du mi 'gyur te/ ci'i phyir zhe na/ 'o ma ni 'o ma'i gnas skabs kyis 'gag par mi 'gyur te/ ji srid 'o ma yin pa de srid du 'gag pa nyid du mi 'gyur ba'i phyir dang/ 'o ma ma yin pa'i gnas skabs su yang 'gag par mi 'gyur te/ gang gi tshe 'o ma ma yin pa de'i tshe na gang yang 'gag par mi 'gyur ba'i phyir ro ⁽³⁸⁾

ここで、滅すると考えられるその事物はそのままの状態と異なった状態のどちらでも滅しはしないだろう。なぜならば、乳は乳の状態で滅しはしないだろう。いかなる乳であれ決して滅しはしないからである。そして、乳ではない状態でも滅しはしないだろう。いかなる時にも乳ではない状態で滅しはしないからである。

『青目註』 第7章第29偈 ⁽³⁹⁾

若法有滅相。是法爲自相滅。爲異相滅。二俱不然。何以故。如乳不於乳時滅。隨有乳時。乳相定住故。非乳時亦不滅。若非乳不得言乳滅。⁽⁴⁰⁾

BP 第7章第28偈

dngos po gnas skabs gang du 'jug par brtag pa de'i gnas skabs de ni gnas skabs des 'gag pa nyid du mi 'gyur te/ ci'i phyir zhe na/ gnas skabs de yod pa'i phyir ro/ /di ltar 'o ma'i gnas skabs nyid kyis 'o ma 'gag par mi 'gyur te/ 'o ma'i gnas skabs yod pa'i phyir ro/ /gnas skabs gzhan gyis kyang gnas skabs gzhan 'gag pa nyid du mi 'gyur te/ ci'i phyir zhe na/ gzhan ni gnas skabs gzhan na med pa'i phyir ro/ /di ltar zo'i gnas skabs su 'o ma'i gnas skabs

'gag par mi 'gyur te/ zo'i gnas skabs na 'o ma'i gnas skabs med
pa'i phyir ro/ /ci ste yod na ni/ 'o ma dang zo gnyis lhan cig na
gnas pa dang/ zho rgyu med pa las 'byung bar yang 'gyur bas de
ni mi 'dod de ⁽⁴¹⁾

事物がある状態に至ったと考えられる場合に、その状態はその状態のままで減しはしないだろう。なぜなら、その状態が存在しているからである。このように、乳の状態では乳は減しはしない。乳の状態が存在しているからである。異なった状態でも、異なった状態で減しはしない。なぜなら、異なるものは異なった状態には存在しないからである。このように、酪の状態においては乳の状態では減しはしない。酪の状態には乳の状態が存在しないからである。もし存在するというならば、乳と酪の両者が同時に留まっており、酪が原因の無いところから生じていることになるので、それは正しくない。

PP 第7章第28偈

gnas skabs gang gis sngar nye bar tshon pa'i gnas skabs das ni
'gag pa nyid du mi 'gyur te/ sngon gyi ngo bo nyid yongs su ma
spangs pa'i phyir per na 'o ma 'o ma'i gnas skabs nyid kyis 'gag
pa nyid du mi 'gyur ba bzhin no ⁽⁴²⁾

先に特徴づけられた状態は、その状態で減しはしないだろう。先の自性がまだ棄て去られていないから。たとえば乳が乳の状態のままで減しはしないように。

PSP 第7章第28偈

tayaiva tāvat kṣīrāvasthayā saiva kṣīrāvasthā na nirudhyate,
svātmani kriyā virodhāt / nāpy anyayā dadhyavasthayā
kṣīrāvasthānirudhyate / yadi hi kṣīradadhyavasthayor yaugapady-
aṃ syāt, syāt tayor vināśyavināśakabhāvaḥ, na tu
dadhyavasthāyāṃ kṣīrāvasthāsti, yadā ca nāsti tadā kām asatī
vināśayet ⁽⁴³⁾

まず、この乳の状態は乳の状態のままで減しはしない。自分自身に対

するはたらきは矛盾であるから。また、乳の状態は酪の状態で滅するのでもない。実に、もし乳と酪の両者の状態が同時に存在するならば、その両者に滅するものと滅せられるものという事態が存在するだろう。しかし、酪の状態においては乳の状態は存在していない。そして存在していない場合に、そこに存在しない何物を滅するのか。

以上のように、ABhの「乳」という譬喩がいずれの注釈書でも踏襲されている。それぞれ比較すると、まず『青目註』がもっともABhの注釈に近い。また、BPはABhの「乳ではない状態 ('o ma ma yin pa'i gnas skabs)」という表現を「酪 (zo)」と書き換えており、より詳細な注釈を施している。このBPの内容を踏まえていると思われるのがPSPで、こちらも同じく「乳 (kṣīra)」と「酪 (dadhi)」に分けて説明している。そして、PPは他の注釈書と若干文脈が異なるものの、やはり「乳」の譬喩を用いている。

本論において取り上げた注釈書群の中で、すべての注釈書が同じ箇所と同じ譬喩を用いているのは管見する限りこの一例のみである。⁽⁴⁴⁾ しながら、このように最古の注釈書と考えられるABhから後代のPSPに至るまで一貫して共通した譬喩表現が用いられている例が確認されることから、必ずしもABhに見られる譬喩のすべてが後代、特に『青目註』、BP以降に付加されたものではないということが分かる。

結語

以上、ABhの譬喩表現の特徴を挙げ、それが諸注釈書でどのように受用されてきたのかを確認してきた。ここで、その考察に基づいて先行研究の説を再度検討してみよう。

まず斎藤 [1988] では、BPでまったく引用されていないことからABhの各章末尾に見られる譬喩表現はBP成立以降に付加されたものであるとの見解が示されているが、実際には第11章の末尾にABhとBPに共通する譬喩表現が用いられていることが確認された。しかしながら、同論が後代の付加として指摘する譬喩の例がいずれも“bzhin no”という形で結ばれているのに対し、この第11章の例のみが“bzhin du 'grub pa'o”という

*Akutobhayā*の譬喩表現に関する一考察

若干異なった形で表現されているため、これのみが例外的に原初的な段階から ABh に見られた表現であるという可能性も考えられる。

Huntington [1986] については、ABh の段階的成立説を主張しており、『青目註』および BP 成立時には ABh のいずれの譬喩もまだ存在していなかったとの見地に立つが、必ずしもそうではないことは上記の例を見れば明らかだろう。また、段階的成立という見解は極めて興味深いものではあるが、今回考察したような譬喩の問題も含めてプリミティヴな記述と、後代に付加された部分をどのように判別するのかという点で疑問が残る。一つの手立てとして『青目註』、BP において言及されていないということ を指標とすることは可能かもしれないが、『青目註』において言及されていない ≠ 羅什も認識していない」ということは『十二門論』との比較から判明しているため、これについては『青目註』の成立と併せて再度検討を要する問題である。⁽⁴⁵⁾

また、ABh の譬喩は採用されている箇所が注釈書によってかなり異なっているため、たとえば ABh に数種類のヴァリエントが存在し、注釈者によって参照していたテキストが異なっていたという類推も可能だろう。しかし、もしそうであるとすれば、ABh が現行テキストに至るまでの段階のどこかでそれらの異なったヴァリエントすべてを現在の形にまとめる作業が必要になるため、可能性としては極めて低いと思われる。実際に、9 世紀初頭の成立と考えられる⁽⁴⁶⁾ 敦煌出土の ABh 写本にも現行テキストに見られる譬喩がすべて確認される。

以上のように、ABh の成立と後代の注釈書における位置づけについては未だ多くの疑問が残るが、ほとんどの譬喩表現については早い段階で成立しており、後の注釈者たちも実際に引用はしていなくてもその記述自体は認識していたと考えられる。

〈キーワード〉 *Akutobhayā*、中論、青目

略号および使用テキスト

ABh : *Mūlamadhyamakavṛtti-akutobhayā*, D. No.3829, P. No.5229

BP : *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti*, D. No.3842, P. No.5242

D. : Tibetan tripiṭaka sDe dge edition
MMK : *Mūlamadhyamakakārikā* → see de Jong [1977]
P. : Tibetan tripiṭaka Peking edition
PP : *Prajñāpradīpa*, D. No.3853, P. No.5353
PSP : *Prasannapadā* → see LVP [1903 - 13]
S. : Stein 収集敦煌写本 No.637
T. : 大正新修大藏經
『青目註』 : 青目釈『中論』 大正藏 Vol.30 No.1564
『十二門論』 : 大正藏 Vol.30 No.1568

参考文献

- ・ 斎藤明
1985 : 「中観系資料」 『敦煌胡語文獻』 (講座敦煌 6) 大東出版社 pp.311-348
1989 : 「無畏論と仏護註の譬喩表現」 『印度学仏教学研究』 37-2 pp.161-166
2003 : 「『無畏論』の著者と成立をめぐる諸問題」 『印度学仏教学研究』 51-2
pp.869-875
- ・ 丹治昭義
1982 : 「無畏と青目註」 『印度学仏教学研究』 31-1 pp.83-88
- ・ Huntington, C.W.
1986 : *The "Akutobhayā" and Early Indian Madhyamaka*, vol. I , II , Ph.D Thesis,
The University of Michigan
- ・ de Jong, J. W.
1977 : *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, The Adyar Library and Research
Centre,
- ・ Poussin, Louis de la Valée [LVP]
1903-1913 : *Mūlamadhyamakakārikās (mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la
Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV ,
ST. Petersburg
- ・ Saito Akira
1984 : *A study of The Buddhapālita-mūla-madhyamakavṛtti*, Ph.D Thesis,
The Australian National University
2013 : *Buddhapālita's Metaphorical Expression*, 『印度学仏教学研究』 61-3 pp.115-
123

註

- (1) 丹治 [1982]
- (2) Huntington [1986] pp.22-23
- (3) 斎藤 [1989] pp.161-165
- (4) *ibid.* p.164
- (5) D.39b, P.46b
- (6) D.37a, P.44a
- (7) D.74b, P.87a
- (8) D.251b, P.284a
- (9) “metaphorical and ironical question directed to his opponent’s objection or criticism” (Saito [2013] p.115)
- (10) T.30 p.3b
- (11) *ibid.* p.18c
- (12) 『青目註』の第1章は冒頭の帰敬偈を第1偈、第2偈として数えているため、他本と偈の数が二つずれる。さらに他本で第8偈と第9偈に当たる偈の順序が『青目註』では逆になっている。そのため、ここに挙げた第11偈は他本の第8偈に相当する。
- (13) 『青目註』の第13章は他本でいう第3偈と第4偈の間に偈が一つ付加されている。そのため、これ以降の偈はすべて他本と一つずつ順番がずれているので、この偈は他本の第8偈に当たる。
- (14) P. *phongs don 'dug pa*, S. *phongs do na 'jug pa*
- (15) D.40b, P.48a
- (16) この箇所についてはテキストのチベット語に異同が見られる(注14参照)。ここではデルゲ版の「尾は投網を据えたようであり (*mjug ma 'phongs dol 'dug pa nyid*)」を採用した。また、この箇所の和訳についてはクンチョック・シタル(高松宏寶)氏にご教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。
- (17) T.30 p.7b
- (18) *ibid.* p.163c
- (19) 『十二門論』にはMMKの偈頌が『十二門論』独自の所説としていくつも引用されているが、それらの偈頌のほとんどが『青目註』とは若干異なった形に漢訳されている。ここでは上述の通りMMK第5章第3偈と考えられる偈頌が「観有相門第五」の冒頭偈として配置されている。
- (20) 「如牛以角峰垂鬚尾端有毛。是爲牛相。」(T.30 p.162c)
- (21) T.50 p.184c
- (22) これについて斎藤[2003]は“「十万偈」の記載は、羅什が単に伝聞によって当該文献の大きさを示したにすぎないとも考えられるが、ここはむしろ般若経(大品)の注釈である「優波提舍」、つまり『大智度論』が「十万偈」とされていることに合わせて、『中論頌』の注釈である『無畏論』の大きさについてもまた機械的に「十

万偈」と記載されたかと理解するのが分かりやすいであろうか。”(p.864 注1) という見解を示している。

- (23) D.38a, P.45a
- (24) D.175a, P.197b
- (25) D.74b, P.86b
- (26) D.251b, P.284b
- (27) na paryāpto 'gnidṛṣṭānto darśanasya prasiddhaye/ sadarśanaḥ sa pratyukto gamyamānatāgataiḥ// (de Jong [1977] p.10) 「火の喩えは見るはたらきを論証するのに十分ではない。それは見るはたらきとともに現に去られつつある所、すでに去られた所、まだ去られていない所（の考察）ですすでに説明されている」
- (28) 『青目註』：T.30 p.6a PP：D.79a1, P.95a2 PSP：LVP [1903-1913] p.114
- (29) pūrvam eva ca sāmāgryāḥ phalaṃ prādurbhaved yadi/ hetupratyayanirmuktaṃ phalaṃ āhetukaṃ bhavet // (de Jong [1977] p.54) 「さらに、もし結果が集合より先に出現するならば、その結果は因と縁を離れた原因の無いものということになるだろう」
- (30) ABh：D.56a, P.66a BP：D.213b, P.241b
- (31) 前述の通り斎藤 [1988] は章の末尾に譬喩表現を置くことを ABh の特徴として、その例を列挙しているが、この第 11 章の例だけは挙げられていない。
- (32) D.42a, P.50a
- (33) LVP [1903-1913] p.139
- (34) D.63b, P.74a
- (35) LVP [1903-1913] p.294
- (36) D.85a, P.98b
- (37) LVP [1903-1913] p.448
- (38) D.49a, P.58a
- (39) 『青目註』の第 7 章は第 7 偈を二つの偈に分割しているため、それ以降の偈の順番が他本と一つずつずれている。
- (40) T.30 p.11c
- (41) D.195b, P.221a
- (42) D.110b, P.135b
- (43) LVP [1903-1913] p.169
- (44) 偈頌自体に譬喩表現がみられる場合を除く。
- (45) 『青目註』は羅什による大幅な加筆が、その序文で弟子の僧叡によって指摘されている。「而辞不雅中。其中乖闕煩重者。法師皆裁而裨之。」(T.30 p.1a)
- (46) 斎藤 [1985] pp.317-323